

附論「中規模都市における文化を通じた頭脳獲得」研究のための序論
マティアス・テオドール・フォークト（ツィッタウ／ゲルリッツ大学教授）
Matthias Theodor Vogt: **Prolegomena to Studies in 'Brain Gain through Culture in Middle Size Cities?** In: 国際文化交流フォーラム 自治体の文化振興はどうあるべきか？Internationales Symposium für kommunale Kulturpolitik, Zukunft der kommunalen Kulturförderung an Beispielen aus Deutschland Universität Kobe, Stadt Kobe, Goethe Institut Osaka 2013

《目次》

1. 「文化的貧困」
2. 課題
3. 背景にある社会的問題
4. 「文化政策」とクリティカルマスの理論
5. 変化しつつある文化のパラダイム
6. 研究の最前線

1. 「文化的貧困」

貧しいとみなされることを誰が望むだろうか？ これは単なる修辞疑問ではない。欧州共同体（EC）理事会の定義（1985年）に従えば、貧困は多次元のだからである。「本決議の目的のため、貧困者とは、(物質的、文化的そして社会的な material, cultural and social) 資源の欠乏のために、彼らが居住する加盟国において許容される最低限度の生活を営むことができない人々、家族そして集団を意味するものと見做されねばならない¹。」そこで我々は、物質的貧困、文化的貧困、そして社会的貧困を区別することにしよう。

この作業はアリストテレスが行ったそれにとっても似ている。彼の『倫理学』では、三種の善が区別されている。一つは外部環境によって幸運にも「外部」から形成される善であり、他の二つは——このように言えるだろう——「内部」から形成される善である。

¹ 85/8/EEC: Council Decision of 19 December 1984 on specific community action to combat poverty, Official Journal of the European Communities No L 2/24. 1985年1月3日発行。

したがって、「外部」の貧困と「内部」の貧困が存在する。アリストテレスは、富 **wealth**（この語は 15 世紀のイギリス英語では幸福 **well-being** を意味した）に関して幾分か幅広く多角的な理解を発展させるよう、我々に促す。この点は後段でさらに探究する。

「文化的貧困」は、EC 理事会の 3 つの貧困の定義において、二番目に挙げられている。このことは何を意味しているのだろうか？ この文をよく見てみると、「文化的」のあとにシリアル・コンマ（ハーバード・コンマ）が無いことがわかる。このことが、「大陸ヨーロッパ」出身の筆者にとってヒントとなるだろう。フランス、ドイツ、イタリア、デンマークその他の版においては、アングロ・サクソン系の書き手によって皮肉にも「文化 **Kultur**」と定義されてきた語を用いている。英語の文章で使われる、大文字の「**K**」²で始まる「文化」は、政治的、社会的、経済的な要素よりも、芸術的、宗教的、精神的要素に力点を置いている。フィンランド版は異なる。19 世紀のカントの語彙に由来する「文化 **kultuuri**」ではなく、英語とフランス語の「文明 **civilisation**」に基づく「**sivistykselliset**」を用いている。確かに、文明に関する貧困というものもあるだろう。テレビ、携帯電話、流行の服、そして上流社会の集団のための似たような装飾品の欠乏といったことから、それは理解されるだろう。

EC 理事会によるアングロ・サクソン系でない「文化的貧困」の定義には、さらに別の側面も含まれている。「文化的貧困」は、芸術的もしくはそれに準ずるものを通じて語られ、継続的な変容過程の中においてある世代から別の世代へと伝承される、人生の意味についての大きな物語 **the great narrative** から排除された状態としても定義される³。現代の文化的貧困は、しばしば代替財による大きな物語の置き換えという形で現れる。

書物の運命は予測できない (**Habent fata sua libelli**)。今となっては EC 理事会の定義は 35 年も前のものである。何が起きただろうか？ この定義は、2001 年のドイツ連邦議会による『貧困報告書第 1 巻』において中心的な参照文として引用されている。非常に興味深いことに、引用の仕方は間違っており、文化が三番目に置かれている (**material, social, and cultural**)⁴。その後、この形の定義はドイツプロテスタント教

² Cf. Lepenies, Wolf (2006): *Kultur und Politik. Deutsche Geschichten*. München / Wien. pp.19-24.

³ Cf. Schatz, Gottfried (2008): *Jenseits der Gene: Essays über unser Wesen, unsere Welt und unsere Träume*. Zürich.

⁴ Deutscher Bundestag (ed.): *Lebenslagen in Deutschland. Erster Armuts- und Reichtumsbericht. Unterrichtung durch die Bundesregierung*. 14. Wahlperiode, Drucksache 14/5990, 08.05.2001. p.10, 28.

会によって 2006 年の『平等な参加についてのメモランダム』において用いられた⁵。そしてここから、この定義はドイツのアカデミックでない論説の中に広がっていった。現在（2013 年 2 月 12 日）では、およそ 9,000 のこの誤った引用がグーグルで見つかり、本来の定義の正しい引用は 77 しかない。したがって、EC の定義はそれ自体、G. シャッツによって文化的対話に必須とされた諸変容の完璧な例なのである。

行政の文章は別の方向をとった。2005 年の『貧困報告書第 2 巻』では、定義の引用（ここでも誤った形である）は注釈へと追いやられた⁶。2008 年に刊行された第 3 巻では、この定義はすっかり無くなっている。2012 年の第 4 巻も同様である。これは、経済主義が、何を含め、何を含めないかという明確なルールを制定する国際連合においてさえ支配的になっていることに起因する。そこでは文化は 2 番目に置かれるのではなく、公共サービスのあくまでも一面、それも最後のものとしてしかみなされない。「経済資源および雇用とともに、特に健康、教育、[そして] 適切な司法、住居、市民権、安全、福祉、情報とコミュニケーション、移動、社会的および政治的参加、レジャーと文化といった他の公共サービスへのアクセスを考慮する必要がある⁷。」似たような状況は、ヨーロッパ、アメリカ、そしてブータン以外の世界各地で発行される社会的な報告書に見出される。2000 年以降、文化的貧困は公的・学術的出版物において当たり前ものになったと結論付ける人もいるかもしれない。しかし良い場合でも文化とその政策は最後に置かれる。それらは公共の、そして社会科学の関心からしばしば除外されている。今日、都市または地域の魅力を説明する典型的な表現は、「快適な設備 amenities」であり（1908 年に初めて使われたこの語は、ラテン語の *locus amoenus* に由来する⁸）、設備の面において有形、無形で付属の利益となるものが言及される。それゆえ、文化は中心

⁵ Evangelische Kirche in Deutschland (ed.) (2006): *Gerechte Teilhabe. Befähigung zu Eigenverantwortung und Solidarität. Mit einer Kundgebung der Synode der EKD. Eine Denkschrift des Rates der Evangelischen Kirche in Deutschland zur Armut in Deutschland*. Gütersloh.

⁶ Deutscher Bundestag (ed.): *Lebenslagen in Deutschland II*, 2001-05-08, footnote p.40; Deutscher Bundestag (ed.): *Lebenslagen in Deutschland III*, 2008-06-30; Deutscher Bundestag (ed.): *Lebenslagen in Deutschland IV*, 2012-09-17.

⁷ Atkinson, A. B.; Marlier, E. (2010): *Analysing and Measuring Social Inclusion in a Global Context*. United Nations, Department of Economic and Social Affairs, ST/ESA/325. New York. p.7.

⁸ <http://www.etymonline.com/index.php?search=amenities> 2013 年 2 月 25 日参照。

的なものではなく、「あれば良い」ものなのである。

しかしながら、こうした状況に対して抗議し、その結果として、物質的、社会的側面を犠牲にして文化的側面を過度に強調することは、逆効果を招くかもしれない。文化研究が為すべきは、「物質的、文化的（、）そして社会的資源」を複合的に分析することなのである。

2. 課題

ここでの関心における問いは、「社会市場経済」の中の「中規模都市 Middle Size Cities」を「若い機能エリート」にとって魅力的なものとし、それによって彼らが設備面のレベルを超えて社会的に行動することを可能にするための人々の努力と社会的変革に対し、「ミューズ」が果たす役割である。

芸術的手法で主導された個人または集団の接触が人間の努力と社会変革の最重要な構成要素の一つであることは、歴史が示している。劇場集会、ベルニサージュ、公開朗読会や類似のパフォーマンス／再現芸術などの文化的接触——「ミューズ」の相互作用——は、あらゆる地域の相違にも関わらず、ヨーロッパの歴史の中で長期にわたり地域および国家コミュニティにとって重要であったと言える。「文化的接触」という用語は、イギリスの研究者にとっては民族間の接触を意味するかもしれないが、大陸の研究者にとっては芸術によって引き起こされた接触を指す。我々の目的に沿って言えば、それはパフォーマンス／再現芸術によって表された意味論システムの中における、互いに異なる価値システムの接触を意味している。

都市の分類は、1887年にローマで行われた国際統計協会の会合に遡る。そこでは農村コミュニティ（Rural Communities 居住者 5,000 人以下）、小規模都市（Small Size Cities 5,000-20,000 人）、中規模都市（Middle Size Cities 20,000-100,000 人）、大規模都市（Great Size Cities 100,000 人以上）という区別が為された。近年、「メトロポリタン・シティ」という用語が政治的、学術的議論の中でキーワードとなってきたために、このローマ分類における大規模都市は通常、「シンプルな」大規模都市（100,000-500,000 人）とメトロポリタン・シティ（500,000 人以上）に分けられる。これまで、ドイツやフランスの公式統計、そして他の国々での多数の統計は、この拡張されたローマ分類を使用している。時には、この分類は地理学者によって批判されることがある。しかしながら、人文地理学においても、統計学においても、国際行政においても、新しい専門用語に関するコンセンサスは未だ形成されていない。2006年に欧州経済領域（EEA）は「中型都市 Medium-sized Cities」という、似たような用語を使用した。その意味す

る都市規模は異なっている。EEA の用語では、小型都市部 Small Urban Area を 10,000 から 50,000 人、中型都市を 50,000 から 250,000 人、大都市圏 Large Conurbations を 250,000 人以上の居住者と区別している。この分類はいかなる国際的な会議（後者はすでに時代遅れと言えるにも関わらず）においても、また文化インフラストラクチャーのメカニズムによっても、正当化されてはいない。本稿で中規模都市 Middle Size Cities という用語を用いる理由はここにある。

非常に高度な知的能力を持つ者は、メトロポリタン・シティまたは「シンプルな」大規模都市に住み、働く傾向がある。大学や研究機関のほとんどが置かれているのもここである。大学のような文化的接触の機関にはこの種の環境が求められるのだ。フンボルト大学のコンセプトである「孤独と自由⁹」とは、大学人の精神に関する問題として理解されるべきであって、都市規模との相関関係としてではない。しかしながら、ヨーロッパの変容過程における主要な問題は残ったままである。もし我々の全てが地方を離れたら、誰が地方に留まり、その地の問題に取り組むことになるのか？ 人間の努力と社会変革に対して責任を負う者は、誰なのだろうか？

一方で、中規模都市は、多くの場合、軽視されているタイプのコミュニティである。文化研究は大都市圏もしくは農村地域を対象とする傾向にある。中規模都市はヨーロッパ史を通じて多くの革新の波を引き起こしてきたことが知られているにも関わらず、である¹⁰。地理学者のペーター・ハグマンは、そのような波を「ビートルズ・パターン Beatles' pattern」と名付けている。「地方都市（リヴァプール）で始まった音楽のスタイルは、首都（ロンドン）へ移り、そして全世界の中心地へと広まる。」ハンガリーの一例として、バラトン湖の近くにあるカポシュヴァール Kaposvár のチーキ・ゲルゲイ劇場 Csiky Gergely Színház がある。素晴らしい建築とともに 1911 年に開場したこの劇場は、1970-85 年の間、その現代的な上演で大きな成功を収めた。1982 年、カポシュヴァールの俳優による一グループがブダペストに行き、カトナ・ヨーゼフ劇場 Katona József Színház を設立した¹¹。現在のポーランドには、新たな形態の演劇が試みられているいくつかの中規模都市が存在する。

⁹ Cf. Schelsky, Helmut (1963): *Einsamkeit und Freiheit*. Hamburg.

¹⁰ Hägerstrand, Torsten (1953): *Innovationsförloppet ur korologisk synpunkt*; idem (1967): *Innovation diffusion as a spatial process*.

¹¹ Mihály Gábor (1984): *A Kaposvár jelenség*. Budapest: Múzsák Közművelődési Kiadó.

第二に、この種の都市は周囲の小規模都市や農村地域にとっての中間的な中心地 meso-centre を形成する、という二重の役割を果たす。居住者一人あたりの買い物のための土地 (㎡) の比率は、メトロポリタン・シティのそれに対し、しばしば 1.5 から 1 となる。ここで疑問となるのは、文化インフラストラクチャーの場合の比率はどうか、ということだ。第三に、中規模都市における主体の数は限られている。したがって、時間に限りがある中で、我々はある都市における異なる価値システムの接触のメカニズムを理解すること、そしてまた、そこで得られた知見を他の都市と比較することが期待できるのである。

本稿の焦点は若い機能エリートに当てられている。彼らは、人々が共に生き、コミュニティを形成するのに不可欠なユートピア的な推進力を含む人間の努力と社会変革に対し、中期的な責任を果たす人々である。ここで言う「若い」とは、20-35 歳のコーホートを指す。「機能エリート」(少なくとも国家的な重要性を持つ決定事項を共有する、小さなしかし支配的な、重なり合うグループの複雑な一群)とは、アカデミックな背景を持つ者もしくは当該コミュニティにおいて重要な社会的責任を担っている人々を指す(我々はクリエイティブ産業やクリエイティブ・クラス・アプローチに限定することはしない。機能エリートの社会的行為に対するより一般的な分析のために、我々が対象とするのは「ミューズ」の役割だからである)。こうした責任については、中世における「探索者」と言い表すことができるかもしれない。すなわち、人口移動の時代に定住地を探した人々である。

個人の社会参加 engagement と文化政策に対する理解がかなり異なるため、ここで取り扱うのは自由市場経済 Liberal Market Economies 下の状況——例えばアメリカ、カナダ、オーストラリア、そしてイギリス——よりも、社会市場経済 Social Market Economies 下の状況である。我々の基本的な仮説は、伝統的な中欧の文化政策——19 世紀における国民国家形成の議論の中で、国家およびコミュニティの両方の次元で作られたもの——は、若いエリートを惹き付けるには相応しくないということである。したがって、ポスト国民国家の時代において、それは根本的な修正を必要としている。

個人が滞在し、居住する都市を選ぶ伝統的な要因は、次のような順序で示される。(1) 仕事、(2) 配偶者の仕事、(3) 社会的、教育的インフラストラクチャー、(4) レジャー・インフラストラクチャー、(5) 文化的インフラストラクチャー。地方コミュニティを形成し、社会的に行動している人々の集団の場合は、どうなのだろうか？

3. 背景にある社会的問題

現在、ほとんど全てのヨーロッパ諸国が人口統計学上の変化による3つの影響に脅かされている。(1) とりわけ高学歴の女性において、出産率が低い。(2) 若いエリートたちは周辺地域を避ける。(3) 非メトロポリタン地域における社会的プロセスは崩壊しつつある。これらの傾向は、特に中規模都市において顕著である。

これは、(今のところ議会制と同義の) 民主的システム (この点においては君主制に似ている) が、政治的、経済的中心部への頭脳流出が継続している周辺地域の傾向を悪化させているという、科学と文化政策の問題群の一つである。基礎的な指標となるのは、支出と人口集中の間において進行中の対応関係に関するブレヒトの法則である。ブレヒトの法則は、本来は1932年にベルリンで行われたアーノルト・ブレヒト (1884-1977) の講義の一部で、その目的は、より高い賠償金の支払いを求める連合国からドイツを守ることであった。これは同年に出版された¹²。ブレヒトが用いた経験的な材料を注意深く見ると¹³、当時の17州のうち10州が、1km²あたり40から170人の間という似通った比率を示していることは一目瞭然だ。ブレヒトが彼の法則のために利用した「赤いザクセン」(300人)、自由都市リュューベック(430人)、ブレーメン(1,300人)、ハンブルク(2,700人)のみが例外である(実際には、ブレーメンとハンブルクは一人あたりほぼ同額の支出であったが、人口の集中率は1対2であった)。それにも関わらず、今日のドイツにおいて、その正当性が極めて疑わしい、16の州と連邦の間のドイツ財政転移メカニズムで用いられているのは、まさしくこの法則——経験的に検証されたことはない——であり、市州ベルリン、ブレーメン、ハンブルクに135%のいわゆる「住民の特権化 *nobilification of inhabitants*」を与えている。

ブレヒトの法則は州と州の間だけでなく、州の内部でも適用されている。例えばザクセン州では、国家から基礎的な財政支援を受けたとき、メトロポリタン・シティは住民の明確な地域手当により潤う。他の都市が受け取るそれと比べると、この剰余金は1対1.52となる。年間一人あたり1,296ユーロがメトロポリタン・シティに、849ユーロが非メトロポリタン・シティに費やされている。これは平均して131%と86%に相当

¹² Brecht, Arnold (1932): *Internationaler Vergleich der öffentlichen Ausgaben*. Vorträge des Carnegie-Lehrstuhles für Außenpolitik und Geschichte an der Deutschen Hochschule für Politik. Heft 2, Berlin.

¹³ Kähler, Jürgen: *Das Brecht'sche Gesetz der Staatsausgaben*. In: Claus-Dieter, K., Corinna, R. U. (eds.) (2006): *Arnold Brecht 1884-1977. Demokratischer Beamter und politischer Wissenschaftler in Berlin und New York*. Stuttgart. p.89.

する。

この剰余金により、メトロポリタン・シティはより多くの文化機関やプロジェクトに資金供与し、それによって魅力を高めることが可能になる。連邦全土の頂点の同等化措置に関しては、ベルリンをアイスランドやポーランドの芸術エリートの出会いの場とならしめている3つのベルリンの州立オペラハウスまたはそれらのプロジェクトは、ヘッセン州、バーデン＝ヴュルテンベルク州、バイエルン州または連邦政府のいずれかによって完全に資金供給されている。このように、全国の納税者は、自らの地域を犠牲にして、国家の誇りを養成するために大金を支払っている。

4. 「文化政策」とクリティカルマスの理論

この政策の背景には強力な経済理論、すなわち反応の持続のために必要な最小限の資源としてのクリティカルマス *critical mass* の理論がある。そのような経済的なモノサシは、機械ではなく人間が生み出すものを基盤とする美学の領域で応用問題とされたことは未だない。逆に、文化史は非中央生産の一定程度の優位を示している。ドイツの博物館を訪れる1億900万人のうち常に25%が2万人以下の居住者の都市にある機関に足を運んでいる。ユネスコ世界遺産のリストは、ここで明白な目安を与えてくれる。

文化政策システムにおいては、住民の地域手当が一層重要である。例えばザクセン州では、2007年から2011年のザクセン州文化財団からの非メトロポリタン・シティに対する資金供給は、メトロポリタン・シティに対するそれに比べ、1対7であった。メトロポリタン・シティを若い都会のプロフェッショナルたちにとって魅力的にしているものが、このような他の地域を犠牲にした資金供給理念によって支えられていることは明白である。国家政策におけるアート財源の配分システムによって、周縁部からの頭脳流出は強まっている。「文化接触の欠如」という意味での「地方的特徴」は、自己成就的予言 *self-fulfilling prophecy* となる。

文化研究は、認識のプロセスが人間の判断の根拠となっていることを認めている。このことは都市の魅力に関して特に当てはまる。

非メトロポリタン・シティについての悲観的な印象は、人口推移に強烈なインパクトを持っている。2011年の上半期において、ザクセン州のメトロポリタン・シティでは0.4%、すなわち一年で約1%の増加が見られたが、それに対して中規模都市ではほぼ同じ割合で減少し、農村地域では約2%の減少であった。

ただし、これは問題の量的な側面に過ぎない。質的な側面を見ると、メトロポリタン・シティでは中規模都市に対して50%の若年層(20-35歳)、100%の研究者の余剰がある。

若い男女が同じ社会的環境で配偶者を見つける機会（結婚市場）は、メトロポリタン地域では一人当たり 3 倍多い。単純に規模と人口密度をも勘案すると、その数字はより大きくなるように見える。しかしながら、必ずしもそうではない。人々は精神的にも身体的にも、中規模都市と似たような人口規模の地域（イギリス英語で *neighbourhood*、アメリカの口語で *hood*、ベルリンの方言で *Kiez*）に住もうとする傾向がある。「インテリゲンチア」に関してもっとも言及されるのは、おそらくマンハッタンのグリニッジ・ヴィレッジだろう。ウェスト・ヴィレッジに 72,000 人、イースト・ヴィレッジに 50,000 人が居住している¹⁴。ここではわずか「45 の建物によって、グリニッジ・ヴィレッジ歴史保存地区は構成されている¹⁵。」ヨーロッパの諸都市、例えばクラクフ、トゥルク、ロンドン、あるいはグリニッジ・ヴィレッジに対して一人あたり百倍もの数にあたる 4,000 のモニュメントを持つゲルリッツを思い描いて、ヨーロッパ的視点から見ると、これは理解しがたいことである。

文化接触に関する政策についての有名な記述のあるリチャード・フロリダの『都市とクリエイティブ・クラス』（2002）〔邦題『クリエイティブ都市経済論—地域活性化の条件』〕を読む際には、地域 *hood* に対する身体的、精神的束縛を念頭に置く必要がある。ある都市がクリエイティブ・クラスを惹き付けるためには、「三つの T」があらねばならないとフロリダは言う。タレント *Talent*（高度な能力、学歴、技能を持つ人々）、寛容 *Tolerance*（「人は人、自分は自分」の精神を持つ多様なコミュニティ）、そしてテクノロジー *Technology*（起業家的精神を奮い立たせるのに必要な技術的インフラストラクチャー）である。

それでは、頭脳獲得が明らかに必要な中規模都市のための文化接触に関する政策の場合はどうなのだろうか？現在のハンガリー政府が行っているように中規模都市を切り捨てることは、長期的に見ればメトロポリタン地域にとっても致命的なこととなる。その個々の部分が正常に発達していなかったり、健康でない場合には、人や国は十分に発達することができないのである。

このような頭脳獲得プロセスの様々なメカニズムを分析すること、そして若い研究者

¹⁴ Cf. http://www.nybits.com/manhattan/west_village/ 2012 年 5 月 1 日参照。

¹⁵ Jay Shockley によるレポート“Greenwich Village Historic District Extension Designation Report” (<http://www.nyc.gov/html/lpc/downloads/pdf/reports/gvillage.ext.pdf> 2012 年 5 月 1 日参照)。

たちが心の中で中規模都市に対して与えている地位を改善するための実現可能な治療法を批判的に分析することは、人文科学研究の重要な課題である。

5. 変化しつつある文化のパラダイム

文化とマネジメント・ヨーロッパ・ネットワーク European Network Culture and Management がユネスコの支援を得て 1997 年に設立された際、ユネスコ事務局長のフェデリコ・マヨールは次のように表明した。「アートへの流動的な支援は、それ自体が一つのアートとなるでしょう。それは個々人に対し、複合的な経済的センス、社会立法への理解、多様化を強めている文化環境への親しみ、そして末端組織への強い参画といったことを呼び起こすのです¹⁶。」

アカデミックな哲学や社会政策においても、かなり大きなパラダイム変化が起きてきている。両方の分野で活動している研究者の一人が、「潜在能力」概念を発展させたアマルティア・クマール・センである¹⁷。彼はサルコジ元フランス大統領によって設置された「経済パフォーマンスと社会進歩の測定に関する委員会 Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress」(スティグリッツ・セン・フィトゥシ委員会¹⁸) に参与した重要な人物の一人であった。センによって用いられた英語「潜在能力 capability」は、オクスフォード英語大辞典によれば「何かを行う力あるいは能力」を意味する¹⁹。もちろん、この一般的な定義は、さらに説明が必要である。「潜在能力」は、それ自体としては、完全な権利を有する市民としての資格を手に入れ、行動できるようになるプロセスを意味している。社会の全ての構成員がそのように振る舞えるようにすることは、今日では公共の福祉であるとみなされている²⁰ (アリストテレスはそれを全員に共通した関心と言っている)。社会の全ての構成員が最低

¹⁶ <http://kultur.org/profil> 2012 年 5 月 1 日参照。

¹⁷ Sen, Amartya Kumar (1984): *Resources, Values and Development*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. Idem: (1985a): *Commodities and Capabilities*. Amsterdam: North-Holland. Idem (1985b): *Well-being, agency and freedom*. the Dewey Lectures 1984. *Journal of Philosophy*, vol. 82, No.4 (April), pp. 169-221. Idem (1992): *Inequality Re-examined*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. Idem (1999): *Development as Freedom*. Oxford: Oxford University Press. Sen, A. K. and Foster, J. (1997): *On Economic Inequality*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.

¹⁸ <http://www.stiglitz-sen-fitoussi.fr/en/index.htm> 2013 年 2 月 25 日参照。

¹⁹ <http://oxforddictionaries.com/definition/english/power> 2013 年 2 月 25 日参照。

²⁰ Mager, Wolfgang (1989) in: Dilcher, Gerhard. (ed.): *Res publica: Bürgerschaft in Stadt und Staat. Tagung der Vereinigung für Verfassungsgeschichte in Hofgeismar am 30./31. März 1987*. Berlin. p. 90.

限の水準の幸福を享受できるようにすることは、幸福 *welfare* の古典的定義である²¹。これには文化的側面、すなわち全員が大きな物語とその継続的な展開にアクセスできることも含まれている。

1990年以降、人間開発指数 *Human Development Index* に基づいてクオリティ・オブ・ライフを測定し、順位を定めることが国連の標準となった。しかしながら、文化的潜在能力に関しては未だ比較可能な基準ができていない。文化政策および文化政策研究にとって、文化的潜在能力の基準を作ることは、重要な仕事である。

ただ、伝統的な文化接触の形態は、若い機能エリートにとっての魅力がすでに失っているということは考慮しなければならない。新しいメディアおよび文化への関わり方の変容は、文化が機能する方法を変えてきた。文化の生産者たちは、美的な印象を与えることと教育的な内容を提供するだけでは、文化の供給者と受容者の間にコミュニティや関係性を形作るのにもはや十分ではないことを理解する必要がある。文化の創出とその批評に参加することへの増大しつつある意欲は、人々を文化的イベントの計画、運営、評価の中に統合することを求めている。そのような、市民社会の理念にその起源を持つ申し入れは、正当な目標であるにも関わらず、しばしば精密さと明確な意味的転用を欠いている。そこで、文化機関と、アイデアと価値の消費者、供給者、受益者の間の関係の観察に基づいて言えば、両者の期待や目標のやり取りにおける鍵要素となるのは、文化とアートの分野に関係し、活動している機関やイニシアティブのミッションを確立するためのアプローチである、と結論付けられる。文化接触という考え方は、国家主義以降の手法によって、再定義されねばならない。

文化接触の再定義は、何十年間にもわたって頭脳流出の被害者となってきた中規模都市にとり、特に重要である。若い機能的エリートは文化接触に対してどのような態度をとっているのだろうか？ パフォーマンス／再現芸術の領域における文化接触は、彼らの態度にどのような影響を与えるのだろうか？

6. 研究の最前線

²¹ Cf. Vogt, Matthias Theodor: *Beitrag der Kultur zur Wohlfahrt von Gesellschaften. Kleine Erläuterung der beiliegenden Ideenskizze*. In Vogt, Matthias Theodor (ed.): *Kultur im ländlichen Raum. Das Beispiel Mittelsachsen*. Kulturelle Infrastruktur Band VIII. Leipzig, S. 17–25.

重要な問題は、中規模都市に関する文化政策についての理論的に説得力を持った文献が、ヨーロッパ全体においてやや不十分なことである。ここ 10 年間で、カナダとオーストラリアにおいて多くの信頼できる研究がなされてきたが、しかしながらそれらは、社会市場経済の中の中規模都市における固有の状況ではなく、農村地域に焦点を当てている。創造都市ネットワークカナダ Creative City Network of Canada のために用意された概論としては、次のようなものがある。

Duxbury, N., and Campbell, H. (2009): *Developing and Revitalizing Rural Communities through Arts and Culture*. Small Cities Imprint, Vol.3 (2011), No.1, pp.111-122.

Voluntary Arts Network (2006): *The economic impact of arts and crafts on rural communities*. VAN Update, 45.

カナダ社会・人文科学研究会議 (SSHRC: The Social Sciences and Humanities Research Council of Canada) はコミュニティ・ユニバーシティ研究連盟 (CURA: Community-University Research Alliance) が行う小規模都市のクオリティ・オブ・ライフおよび文化のマッピングを支援しており、その中には雑誌『小都市の印象 Small Cities Imprint』へのオープンアクセスも含まれている。これはカナダ政府によるカナダ農村地域パートナーシップ Canadian Rural Partnership の活動の一部である²²。

同じようなコミュニティ・ユニバーシティ研究連盟はフランスにもあるが、政府からの支援は受けていない。例えば中規模都市同盟 (FVM: Fédération des Villes Moyennes) のように、多くの中規模都市が文化関係のテーマにも携わる自前のグループを結成している。

オーストラリアの状況については、例えば以下を参照せよ。

Donald, B. (ed.) (2008): *Growing the creative rural economy in Prince Edward County: Strategies for innovative, creative and sustainable development*. Kingston, ON: Queen's University, 2008.

Dunphy, K. (2009): *Developing and Revitalizing Rural Communities through Arts and Creativity: Australia*. Vancouver: Creative City Network of Canada.

²² <http://maltwood.uvic.ca/cura/> 2013 年 2 月 25 日参照。

カナダおよびオーストラリアの事例は、以下のような重要な研究を導くことになった。

Selada, C.; Vilhena Da Cunha, I. (2010): *Criatividade em Áreas de Baixa Densidade: O caso da Vila de Óbidos*. In: Oliveira Das Neves, A. (coord./eds.): *Criatividade e Inovação - Cadernos Sociedade e Trabalho*. Lisboa: Gabinete de Estratégia e Planeamento - Ministério do Trabalho e da Solidariedade Social, 2010. pp.197-211.

Selada, C.; Vilhena da Cunha, I.; Tomaz, E. (2011): *Creative-based strategies in small cities: Guidelines for Local Authorities*. INTELI - Inteligência em Inovação, Centro de Inovação. Óbidos.

いずれの研究も経済・人文的分析に関する最新状況について書かれているが、美学的な要素を反映させる意図は欠けている。

クリエイティブ・クラス、頭脳流出、農村地域開発に関する問題については広く論じられてきたが、中規模都市における文化政策に関してはそうではない。この問題を扱ったものとして、

Heinrichs, W.; Klein, A.; Bendixen, P. (1999): *Kultur- und Stadtentwicklung. Kulturelle Potentiale als Image- und Standortfaktoren in Mittelstädten*, Forschungsprojekt im Auftrag der Wüstenrot-Stiftung, Ludwigsburg.

Hellmig, P. (1997): *Kommunale Kultur als Image-, Attraktivitäts- und Identifikationsfaktor -Empirische Untersuchung in 12 Mittelstädten-*, Dissertation, Tübingen.

アートに対する行動についての優れた報告の一つは、特に中規模都市に注意を払って論じているわけではないが、変化している文化のパラダイムについての重要な手掛かりを与えてくれる。

Moeschler, O.; Vanhooydonck, S. (2011): *Kulturverhalten in der Schweiz. Eine*

vertiefende Analyse - Erhebung 2008, Bundesamt für Statistik (BFS) (Hrsg.),
Office federal de la statistique (OFS), Neuchâtel.

多基準による決定と都市計画（都市構造の伝統的な諸要素よりもはるかに多くのものを考慮する必要がある）の複雑さについては、以下のものが焦点を当てている。

Squillante, M.; Marisa S.; Antonella V. (eds.) (2012): *Sant'Agata de' Goti: tracce. Dai testi e dalle epigrafi verso un sistema informativo territoriale*. Milano, Franco Angeli.

Trupiano, G. (2012), *Progetto SURE e Trasferimento della Conoscenza al Territorio*. Artis Series Vol. 1, L.U.P.T. Interdepartmental Research Centre - Laboratorio di Urbanistica e Pianificazione Territoriale.

文化経済学においては、場の要素としてのアートと文化に関する問題は 1980 年代から広く議論がなされてきた。その中でも特定の種類の文化インフラストラクチャーを分析したのは少数であり、例えば、

Umlauf, K. (2008): *Kultur als Standortfaktor: Öffentliche Bibliotheken als Frequenzbringer*. Institut für Bibliotheks- und Informationswissenschaft der Humboldt-Universität zu Berlin, Berlin.

大都市圏でない地域での文化の経済的影響についての取り組みはさらに少ない。いくつかの例として、

Vogt, M. Th. (ed.) (2000): *Kultur im ländlichen Raum. Das Beispiel Mittelsachsen*. Kulturelle Infrastruktur Band VIII. Leipzig.

Stasiak, A. (2007): *Some Remarks on the Role of Rural Areas in Poland's Spatial Development*. In: *European Spatial Research and Policy*, University of Łódź, Vol. 14, No. 2, pp.83-88.

Vogt, M. Th. unter Mitwirkung von V. Kreck und den Fellows des Collegium PONTES Görlitz-Zgorzelec-Zhořelec (2012): *Empfehlungen zur Stärkung der sorbischen Minderheit durch Schaffung eines abgestimmten Selbstverwaltungs-, Kooperations-, Projekt- und Institutionenclusters*.

Europäisches Journal für Minderheitenfragen Vol. 5, No. 4.

中規模都市における文化政策に関しては、筆者らは多くの文化的アクターの分析を行ってきた。例えば、

Dürsch, Hans-Peter; Vogt, M. Th.; et al. (2009): *Akteursanalyse kulturelle Infrastruktur Erlangen*. Görlitz.

Vogt, M. et al. (2011a): *Akteursanalyse kulturelle Infrastruktur Landsberg am Lech*. Görlitz.

Vogt, M. et al. (2011b): *Akteursanalyse kulturelle Infrastruktur Altötting 2020*. Görlitz.

Hinrichs, H. (2012): *Verwaltungsgericht Görlitz 12 K 123456789/12. Urteil vom 28. April 2012 des Verwaltungsgerichtes Görlitz in der Verwaltungsrechtssache des Instituts für kulturelle Infrastruktur Sachsen GmbH, Kläger, gegen die Kulturstiftung des Freistaates Sachsen, Beklagte, wegen Projektförderung*.

ザクセン地方の統計に関しては、下記の形で出版されている。

Vogt, M. (2012): *Kulturland Sachsen - Aufgabe der Kommunen*. In: Bildungswerk für Kommunalpolitik Sachsen (ed.) (2012): *Kulturland Sachsen - Aufgabe der Kommunen*. Hoyerswerda, pp.7-31.

(訳・寺田 卓矢)